

國佛教における國家意識なる論文にも、そのようならすけの缺けてゐることを認めざるを得ない。これは單なる教學史の問題ではなく、中國社會・佛教の史的考證のうらづけがあつて、より完全な研究が得られるのである。

中國にかぎらず、インド・日本においてもその教學研究がともすれば、狭い範圍に局限されて、たとえば僧肇であれば肇論、羅什・慧遠は大乗大義章のみの領域ですべてを理解しようとする從來の試みは、あたかも佛教史の研究が、ともすれば、教學のうらづけのない、單なる歴史的現象の羅列に終る惡傾向におちいりやすいのと同様に、學徒の戒心すべきことと言わねばならない。これは實は横超博士の著書への批評ではなく、私自身の研究態度に對する省を述べさせて頂いたのである。(牧田諦亮)

〔法藏館刊A5版本文三八一頁價九〇〇圓〕

Vimuktimarga Dhutan-ganirdesa
Critically Edited by Genjun
H. Sasaki

解 脫 道 論

—頭陀品チベット校訂本文並びに譯註—

佐々木現順校訂

この書はその副題に示されているように、漢譯解脫道論の第三章頭陀品、南傳 *Vissuddhimagga* の第二章 *Dhutanga-niddesa* に相當するチベットの本文にその和譯と註釋とをつけて出版されたものである。解脫道とは解脫への道であつてここでは戒定慧の三學を意味する。三學を修するに當つて先ず戒學において、戒を清淨に持するには少欲知足などの功德を成就すべきであり、その功德は頭陀 (*dhuta* 又は *dhuta*) の行によつて得られるのである。頭陀 *dhuta* とは「振り捨てられた、取り除かれた」という意味で、智によつて煩惱を滅するところの行をいい、*āra* は支分でそれを實踐修行する項目である。これに十三あつて、衣食住の衣に關するものが(1)糞掃衣、(2)三

衣の二、食に關するものが(3)乞食、(4)次第乞食、(5)一坐食、(6)節量食、(7)時後不食の五、住に關するものが(8)無事處坐、(9)樹下坐、(10)露地坐、(11)塚間坐、(12)遇得處の五、精進に關するものが(13)常坐不臥の一である。パーリ傳や有部などでは十三であるが中觀系は十二で、十二頭陀經という經典もあり、一般に十二頭陀といわれている。これ等の頭陀行の支分の一について、その意味、どうしてそれを受けるか、どうすればそれを失うか、どのような人がこれを修するかなどについて細かく述べるのがこの頭陀品である。頭陀品自らはこの頭陀行は佛陀が制定せられたものであると説いているが、頭陀説はパーリ佛教の中で漸次整えられて、後に有部や大衆部などの經律、中觀派、瑜伽派の大乗の論にも説かれるようになったものであると考えられている。この十三の項目は律の細かい規定とも通ずるものを持つているが、ともかく部派佛教時代の教團において、律とは別に解脫への道として實踐修行されて來たものであらう。解脫道論の中の頭陀品だけが、どうしてチベット藏經の中に傳え

られたのであるかということについては、この書の著者は何も述べていないが、それは恐らくこれが具體的な實踐修行論であるからであろう。著者はこの書のはしがきの冒頭において、「阿毘達磨教學を佛教思想史の上で取り扱う場合、その觀點に三種の様態を興えることが許されるであろう」と述べ、その第三として實踐修行に關するものをあげ、その立場からする著者の第一歩の成果が本書であると云つてゐる。思想を明らかにする上にその實踐面をも考察しなくてはならないことは當然であつて、その意味においても、阿毘達磨教學のみならず、部派佛教更には大乘佛教、廣く佛教學を志しているものすべてにとつて、この書が手頃な大きさで出版されたということは大きな意義があるものと考えられる。しかし實を言へば、この書はまた別の、次のような大きな意義を持つてゐるのである。

た最も大部のものは支那に傳えられた漢譯の三藏である。肝腎の印度本土のものは回教徒の目を免れたものがネパール、北部印度などから僅かに發見せられてゐるだけであり、西域、中央アジアなどから西夏語、トカラ語などのものも發見發掘されているがこれも極めて限定されたものにすぎない。またまつた Canon として傳えられて來たのは、前記漢譯の外にはチベット所傳のものやパーリ所傳のものがあるだけである。印度佛教は初期の部派佛教がセイロンに傳えられ、後期の大乗佛教が直接チベットに傳えられたのであるが、ごく大ざつばに言うると、このチベットとパーリとを合わせたものが丁度漢譯の三藏に相當するのである。チベットは大乘を受け持ち、パーリは小乗を受け持つてゐるわけである。佛教は傳道のためにこのように各國の言語に譯されて傳えられたのであるが、現在の佛教學の研究においては、逆にこの各國語の文獻からその本源に遡つて佛教が研究されなくてはならない。原始佛教乃至は部派佛教の研究にあつてはパーリと漢譯との比較、大乘佛教の研究にあつてはチベ

ットと漢譯との比較という方法は全く缺くことが出來ないものとなつてゐる。そしてその爲にそれ等の間には、サンスクリット、プ拉克リットをも含めて各種の比較の辭典辭書類が完成されてゐるのである。しかししてまここで問題にしないでならないのはパーリとチベットとの關係である。前述のように大乘小乗を含んだ漢譯三藏の中の大乗をチベットが受け持ち、小乗をパーリが受け持つとする、チベットとパーリとの間には相應するものはないのである。しかし canonical にはそうであつても、當時の佛教圈内の各國の佛教が互いに孤立していて全く交渉であつたのではなく、パーリ佛教は印度を中介してチベット佛教と接觸することもあつたであろうし、またビルマに傳えられたパーリ佛教は直接チベットと接觸したかも知れない。ただ教義的に canonical に異つた佛教であつたために、文獻として残つてゐるもので相應するものが殆んどないのである。またパーリと漢譯との關係にしてもそれは中介者を持つてゐるのであつてこれ等が直接に接觸したことは殆んどなく、その極めて稀な

例としてただ Samantapāsādikā に對する善見律毘婆沙と Visuddhimagga に對する解脱道論などがあるだけである。そしてこの書の本文、この本文自らが稱する「梵語では Vimuktimārgadhutagunānīrdeśa と名づけ、チベット語では nman par grol bañi lam las sbyans pañi yontan bstan pa と名づけられる」この本文は、更にそれ等をチベットと關係づけるものとして二重の意味で稀れな文獻であるということが出来る。間接的であるにせよパーリとチベットとの佛教テキストの間で相應するものが、ごく僅かではあるがこの外にもあることがすでに知られていて（寺本婉雅氏の西藏傳の阿含經について、〈宗教研究新二ノ四〉、赤沼智善氏の漢巴四部四阿含互照錄所收の附録）、それは五部四阿含に屬するものであり、筆者も阿含がどのようにしてチベットに受け入れられ、またどのようにに變容しているかを研究して見たいと思ひながらも未だに果さずにいるが、この方面の成果としては最近の學界においても、佐々木敬悟氏の「本生經類のチベット譯について」があり、この方面の研究、パーリと

チベットとの關係についての考察も次第にすすめられてゆくことであらう。この書の著者もそのはしがきに述べているように、このテキストは「資料としての價値のみでなく、それによつてパーリの傳統がチベットの傳統の中で如何に變遷をうけていつたかという問題をさぐるにも一つの觸光を與えることにもなり」發展しつつある佛教學が新しく開こうとしている一つの方向を指示するものであるということが出来る。

解脱道論と Visuddhimagga との關係については長井眞琴氏がはじめて JPIS 1917-19, pp. 69-80 において論じ、更に一九三三年刊行の國譯一切經論集部七、解脱道論の解題において、干潟龍祥氏がこれを検討して内容の詳細な比較對照をも行つてゐるが、一九三七年には印度の Poona かの P. V. Bapat 氏の 'Vimuttimārga and Visuddhimagga' が刊行されている。Bapat 氏は長井眞琴氏の所論をも検討しつつ、解脱道論と Visuddhimagga との比較研究を Visuddhimārga に對する Dharmapāla の註釋をも依用して、文字通りあらゆる方面から行

つてゐるが、Visuddhimagga は解脱道論の原典或いはそのもととなつたテキストに Buddhaghoṣa が自己の解釋を加えて名前も解脱道から清淨道に變えて Visuddhimagga としたのであり、解脱道論は昔印度支那半島にあつた扶南國の僧、僧伽波羅が建康において翻譯したものであることなどは確實であり、解脱道論の著者が優波底沙 Upatissa であることも間違いないとしても、その Upatissa が果して長井眞琴氏のいうようにセイロンにおける律の傳持者の一人である Upatissa と同一人物であるかどうかは疑問であり、また兩書のもとなつた原典が何時何處で書かれたものであるかは確定出来ないと言つてゐる。原典の言語についてもそれがパーリ語であつたか、他のプラクリットであつたか確定は出来ないものであり、Bapat 氏がこの頭陀品のチベット譯を發見したのであるが、チベット譯があるということはこれの原典が印度本土で書かれて後にセイロンにもたらされたものではないかということをも考えさせるものであると言つてゐる。それ等のことをここで詳しく紹介すること

は出来ないが、とにかく Bapat 氏はさき書の著書を刊行して後、更に頭陀品のチベット譯を、自らネパールで發見せられた一六三三年の寫本とナルタン版その他のものとを校合しつつその研究に没頭して居られ、近くその出版を意圖して居られるということである。この書の著者佐々木現順教授は印度在留中に Bapat 氏の研究に若干の協力をされて Bapat 氏が用いていた五種の異本を見る機會を得られ、更にドイツに渡られてミュンヘンの圖書館でそのラサ版を見、これに大谷大學所藏の北京版を加えて計七種の異本を校合することによつて、この解説道論頭陀品のチベット譯の校訂本が出来上つたのである。著者の所見によればラサ版が比較的良好に整つていて、ということであり、またこの頭陀品チベット譯のチベット語は比較的古い形のものであつて、且 colloquial language が多く混入しており、それ等については印度に在住しているチベット、ラサの學僧 Rakra 師より諸種の指示を受けられたということである。チベットでは現在でも實修されているようであるが、これが支那、日本で

どのように變容したか、それはまた地日を期しなくてはならない。現在の我我には、この頭陀行はその通りに實踐出来ないものではあつても、それがどのようなものであつたかを知る必要はあるのである。この書が示唆しているチベット佛教とパーリ佛教との關係の解明への方向は發展しつつある現在の佛敎學の分野においては是非推し進められなければならないところのものである。

(1958.12.15發行、法藏館、大谷大學研究
 成果刊行補助費並びに史蹟研究會〔大阪〕の補助費による出版、A5、一四頁、頒價五百圓)(徳岡)

阿毘達磨思想研究

佐々木現順著

阿毘達磨佛敎の研究は諸學者によつて幾多の收穫がおさめられてはいるが、その多くは外面的文獻研究に限られ、内面的思想研究は比較的ゆるがせにされている。ここに紹介する佐々木教授の「阿毘達磨思想研究」は始めて総合的に阿毘達磨佛敎の思想面よりの解明を試みたもの

であり、印度及びヨーロッパに於ける外遊を通じ、多年にわたる學究生活の結晶である。

著者の意圖によれば、本書は文獻を基礎とし、或はそれを再批判し、更に言語學的方法論をとることによつて阿毘達磨佛敎の哲學思想を客觀的に把握しようとする。しこうしてかかる方法をもつて、阿毘達磨思想を根本的に性格付けているところの實在論の問題を取りあげ、この問題に焦點が絞られている。ところがその實在論を批判することによつて却つて實在論的性格よりも認識論的性格がそれにとつて變るべきものではなからうかということを見出している。又阿毘達磨思想の歴史性をも忘れることなく、それを研究し、規定することによつて、それに續く大乘佛敎の歴史性を尋ねようとする。それ故に本書に——佛敎實在論の歴史的批判的研究——という subtitle が附せられている。

まず第一篇「南傳阿毘達磨の哲學」を見るに第一章は「parivatti」の概念の種々相とその意義」「相・味・起・足處の範疇」「善の概念とその意義」「縁の概念